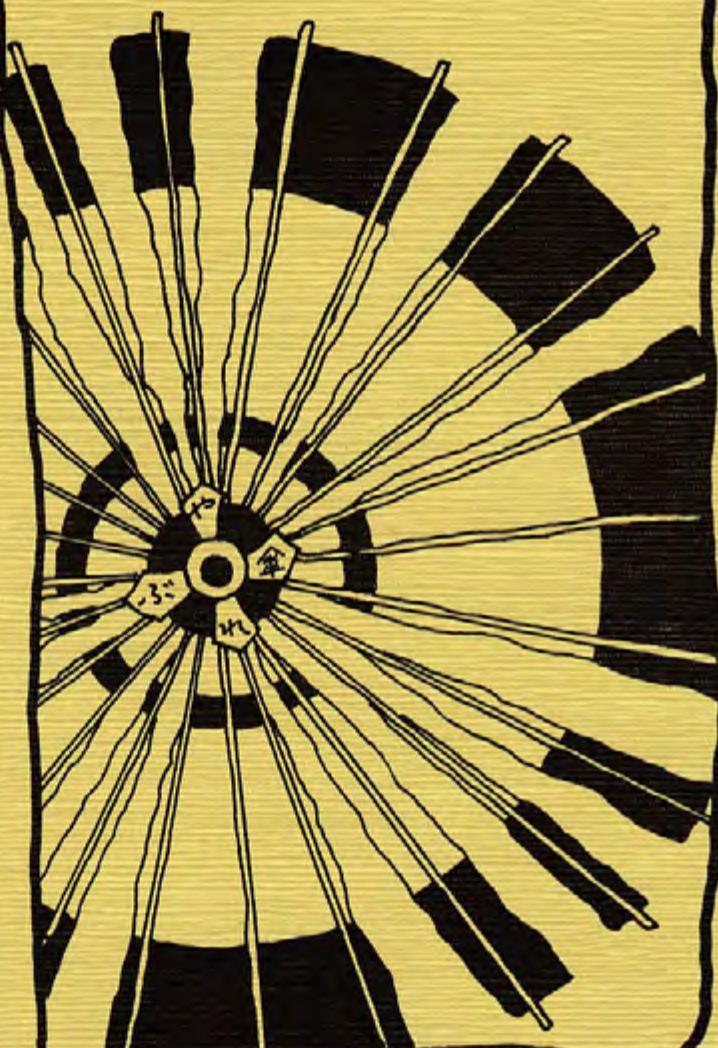


やぶれ傘



一〇一号
二〇一八年四月

畠みちはすこしのぼりに蝶の昼　根橋宏次
駐車場の出口入り口花はこべ　きくちきみえ
タクシーが露地よりぬつと鳥曇　大島英昭
舟あまた湖面に花の座あまた　藤井美晴
くさり付きコップで受ける春の水　丑久保勲
暖かし社殿の右の力石　瀬島洒望
土筆摘む十本までは数へつつ　廣瀬雅男
春の昼広口瓶に飴色々　青谷小枝
しばらくは硝子戸越しの蝶の昼　安藤久美子
花疲れいも羊羹を口にする　白石正躬
下萌や目玉ばかりの稚魚の群　有賀昌子
牛小屋の屋根に鳥が春の昼　天野美登里
櫛の木の巣箱夕日の正面に　渡邊孝彦
城跡の眼下にひらけ春の湖　秋山信行
春の日に泣きわめく子の「我在り」と　松村光典

抄集句選　紀傘　夫　大崎　れぶや

啓蟄の玻璃に揺れる枝映りけり　神山市実
橋脚を水さかのほる里の春　黒澤次郎
ひとりごと増えてひとりや日の永し　小巻若菜
春眠や隣家が回す洗濯機　小山陽子
駅を出て春三日月を真向ひに　齋藤朋子
二坪を耕しをれば土匂ふ　佐藤稻子
探梅やいつか重たき靴の泥　高橋均
雪晴れや垂るる半は何拍子　貫井照子
如月の今日は卒寿の誕生日　橋本美代
雪残る上に淡雪今朝の道　山本久枝
薄氷の結ばれしとも解けしとも　浅嶋肇
卒業す筒もてお面小手ありし　安齋正蔵
カーテンをすぱつと開ける雪の朝　泉一九
春めくや先ずは薬缶を磨き上げ　岩藤礼子
始に乗りしまめ雛段の端　奥田温子

仏夕連バ梅鶴故
像暮翹スの郷
展のは停木高の
の庭小傍のく水
薬の雨の下飛は
師花の花でびゆ
如木庭壇昼立た
来瓜に餉立た
にほ花すをつか
風の咲み老梅に
光白か咲夫の春
るくせく婦空隣
子

春店啓雪残そ着
風頭蟄溶るこぶ
にでのけ雪く
ギ思玻て好れ
タは璃かれて
ーすに部月食の
力を活ん雪割
をゴ始るるの色
鳴ヘる上音見と
らチユ枝まるれ
す映日歩れを
男日今れを
居ツけ曜く
て pri 日犬日
市実

亀岡睦子

神山市実

強棕耳雛何水風
東櫛元出と耕呂
風のですな吹
葉ペ吉く白き
やをンび人きに
若ワペしに根選
者サソン箱会ま
並ワ草すびし
ぶサをにひぐ
ラ振祖たヒ大
一すつ父しヤ根
メ雪ての浅シ俎
ン解み文きン板
屋風る字春スに
枝

ひ風大梅お寒ペ
と船樹の向明ン
とどに花かく落
きを八て観がひるす
子十白音割音
の歳木堂建りに
風の蓮の日卵春
船と息の真のに
遊遊び近國身き
け吹盛ひ出二か
りくりにすつな
木村瑞枝

上林富子

校交照昼春運極
庭番り下う休寒
ににりゆら五
軋届のる雲キ
むきらかりの口
旗し傘ゆ間を
竿財ひと
春布つと
一臚のの
番月町雲光生
り

黒木東吾

音犬亀子ば梅竹
立小鳴どろ咲の
て屋いもと匙添
ににて來落つて
て赤応雀へて
家募穩コーン真
壊い葉れの冬
し座書のは
を布がうつけ
り團期うつろ
桜春限か
時雪めな
散たる
氷倉澤節子

からかさ集

春身突花寺初春
雷体き吹の午眠をひ
やに出雪奥のひと
動もしかの学小たり
きい青園恋さむ
始い饅ま猫きざ
めかのしら香でのぼ
しら香でのぼる
ダとがとこと
ン出鼻続大りラ
ゴすに聞カ小池一司
ム覗抜くこきか
シ汁け道ゆ旗な

苗春豆犬鳥橋霜
札の撒ふ帰脚柱
の川きぐるを蹴
消ペをり鯉水散
えツ隣はさら
かトのん
けボで川かし
てト人田上にて
をルにに向ぼあ
りの見入る
木浮らる
のきれ測し里通
芽沈け量まの学
時みり士ま春路
黒澤次郎

今年またいつもの角に焼芋屋
眼張煮て器を選ぶ夕餉かな
ひなまつり歌四番まで歌ひけり
降り始むる春雨の中ポストまで
新聞紙にくるまれし独活もらひけり
新角のある豆腐に木の芽味噌をのせり
ひとりごと増えてひとりや日の永し

小巻若菜

からかさ集

佐々木あつ子

モーツアルトの五臓に滲みる風邪の夜
悪感来る予感の宵や寒の入り
迷ひなく湯婆婆の夜具に猫は来る
書初を児へとポストに投函する
春潮の渦巻き黒く座喜味城
話人にもならぬ過労や春の雨
五人の孫を抱つこし剪定す

ア
ン
コ
・
ル
・
ワ
ツ
ト
の
日
の
出
春
シ
ヨ
ー
ル
神
田
川
の
堰
の
音
の
日
の
出
春
シ
ヨ
ー
ル
庭
に
あ
る
燈
染
籠
桂
ひ
芽
す
と
吹
つ
き
の
鴨
椿
梅
園
を
耕
し
を
れ
れ
ば
ば
れ
れ
は
さ
は
踏
む
の
音
の
流
し
さ
は
霜
柱
佐
藤
稻
子

からかさ集

べ濃諸春境神藤
ビき葛の内木の
一色祭旅の花窓
カ力の気太土を窓
一黄付鼓俵結より声
に身かでにぶ声
坂をぬでにぶ声
で越ごう時シ藁の
されはちを一縄つ
さんに報ト風つ
るに白せ春ぬ
梅春髪せ春ぬ
二の増ゐの光け
月朝しる雨るに

篠崎志津子

し啓古近死小わ
ら蟻書頃に便づ
梅の店はかなる
や駅の富士起
湯島前平よくて
の交番月見入る
の坂ひ見える
の小とまふ実
理な春朝忌尽
屋し霞月明り
し啓古近死小わ
ら蟻書頃に便づ
梅の店はかなる
や駅の富士起
湯島前平よくて
の交番月見入る
の坂ひ見える
の小とまふ実
理な春朝忌尽
柴崎和男